『筑波日本語研究』 第八号 筑波大学 人文社会科学研究科 日本語学研究室 2003

終助詞「かしら」における男女差の形成
—近代小説における用例調査を中心に—

任　利

キーワード：かしら、男女差、自問表現、丁寧さ、小説の文体

要　旨

本稿では明治初年から現在までに発表された小説を用い、終助詞「かしらん＞かしら」という語形変化の流れの中での男女の使用差を調査した。昭和前期頃に語形が「かしら」に定着するとともに、女性的な表現として定着していることが分かった。また、明治後期の男女の使用差を考察したところ、明治後期の作品では、女性の発話に丁寧体と共存して終助詞「かしら」を使用する用例が多く見られた。これは、直接的な問いかけや依頼を避け、柔らかな丁寧さを示しており、明治以後形成された発話の仕方における男女差の反映と見られる。小説の世界では、明治後期から「かしら」を使用する女性のステレオタイプが形成され、大正期・昭和期をへて、現在に至り「かしら」が女性的表現として定着してきたと考えられる。

1. はじめに

現代日本語の終助詞には、男女による使用差が認められる。例えば、終助詞「かしら」は主に女性が使用するものとされる[*1]。最近の用例調査でもいずれも終助詞「かしら」が女性に多く使用されているという結果を示している。例えば太田（1992）、後藤（1996）などがあげられる。太田（1992）はテレビドラマの脚本を資料として終助詞使用の性差を調査して、男性による「かしら」の使用例が見られないという結果を示している。後藤（1996）は［CD-毎日新聞 '93］をコーパスとして新聞記事テキストデータを分析し、新聞記事の中に現れる終助詞「かしら」の 149 例の中に、男性の使用例は 9 例

*1 『日本語文法大辞典』（山口明穂他編、明治書院 2001）、『日本国語大辞典』（第二版小学館 2000）、『大辞林』（第二版松村明編、三省堂 1995）などを参照されたい。

と少数であるという結果を示している。現実の言語生活で、女性が本当によく終助詞「かしら」を使用するのかどうか、別に検証が必要であると思われるが、今までの調査結果から見ると、終助詞「かしら」は女性のことばとして認識されていると考えられる。そこで、いつごろから、そしてなぜ終助詞「かしら」が女性のことばとして形成されたかは興味深い問題となる。本稿では、明治初年より現在まで刊行された小説を調査し、以上の問題を考察していく。

小説を用いて、言語における男女の使用差を見る上では、実際の会話における性差が小説の会話文にいかに反映しているのか、作者が作品創作のテクニックとして性差マーカー[*2]を用いることによって生じた効果の面などを留意しなければならない。それは、小説の会話文は実際の会話と違い、作者が登場人物に語らせるものであり、通常の音声言語と違い、書記言語の一種となるからである。通常の音声言語では、声の高さ、音声、音調、イントネーションなどにより、発話者が男性か女性かすぐ判別できるが、小説の会話文などのような書記言語の場合は発話者の性別が文脈からの情報などで明示されないと、読者は発話者の性別が分からなくなる恐れがある。日本語の小説では通常の音声言語より多くの性差マーカーが使用されていることを検証した研究がある[*3]。しかし、同研究によると、読者自身が同じような場面では同じ性差マーカーを使わないが、一方で小説中の性差マーカーを別に不自然と思わず、リアルに受け取ることができるという。作者がどのような場面で、登場人物の男女にどのような言葉遣いを語らせるかは、作者が読者と共有する男女の言葉遣いのステレオタイプに基づいて書いているのであると考えられる。つまり、男性はどのような発話の仕方をすべきか、女性はどのような発話の仕方をするかという共通した言語規範を持った上で、読者は小説の会話文を自然に受け取るのである。したがって、小説で語られた会話文は実際の会話に比べると、「男性の役」、「女性の役」をより明らかに反映し、性差が強調され、誇張されたところがあるが、小

*2 本稿では、発話者の性的特徴、つまり使用者は男性なのか、女性なのかを明示する言葉づかい（言語表現）を性差マーカーと呼ぶ。例えば、人称代名詞の「ぼく・俺・あたし」など、文末表現の「わ・ぜ・ぞ」などは性差マーカーである。

*3 Vanbaelen(2003)の調査によると、小説の会話文には普通の会話より多くの性差マーカーが含まれているという。しかし小説読者に対してアンケート調査した結果、読者自身は同じような場面ではこのような性差マーカーを実際に使わないにもかかわらず、小説の性差マーカーを別に不自然とは思っていないという。

説の会話文を分析することにも、それぞれの時代に性差の現れ方を捉えることができると思われる。

2.「かしら」の語史をめぐって

よく知られているように終助詞「かしら」は「かしらぬ>かしらん>かしら」というような変化を辿ってきた。これについて、村上（1981）、山口（1990）、佐々木（1993）、堀崎（1995）、矢島（1996）などの研究が挙げられる。これらの研究により、明らかになったことは以下のようである。

(a) 終助詞「かしら」は「疑問表現＋しらぬ」という構文をもとに発達してきたものである。

(b) 原型と思われる形式「かしらぬ」は大蔵流虎明本狂言あたりから見いだされる。

・あいつめにくひつかふかしらぬ　（虎明本狂言・因幡堂）（村上 1981）

(c) 近世江戸語資料には「かしらぬ」と「かしらん」が並行して使用され続けている様子が見られる。

・かみゆひはなぜこぬかしらぬ　（洒・越里気思案）（堀崎 1995）

・なぜ自めへの子はあんなに人の客までとりてへものかしらん

（洒・見通三世相）（堀崎 1995）

江戸時代の洒落本には既に「かしら」の形が見られるが，稀な用例である。

・文さんはきなんせんかしら　（洒・青楼五雁金）（堀崎 1995）

諸研究は中世末期から近世期にかけ、文末の「しらぬ>しらん」が疑問詞「か」と一体になり、現代語の終助詞「かしら」に近づいている様相を明らかにしている。ただし、調査範囲は中世末期、近世期に限られ、いつ頃「かしら」という形式に定着したのかは課題として残されているが、このような「かしらぬ>かしらん>かしら」という語形の変遷は終助詞「かしら」の基本的意味・機能と強く結びついていると考えられる。「……か」という疑問文が表す疑問について、自ら「しらない」ということを示すわけである。いわば、終助詞「かしら」は相手に答えを求めるより、むしろ自分に対して自問する面が強いという自問表現形式であると考えられる。一般的に、広い意味で疑問表現には「疑い」と「問い」が含まれているが、「かしら」自体は「疑い」に属するものであろう。つまり聞き手を想定しない対自的な場

面に使用されるのが本来の働きである。しかし、湯澤（1953･1954）、国立国語研究所（1951･1960）、及び山口（1990）、三宅(2000)などが指摘してきたように、「かしら」は対話において聞き手に「問う」場合にも用いられる。ただ、「その自問性の強さからみて、質問表現としての応答の要求性は決して強くない」（山口 1990）のである。

本稿では、「かしら」の基本的な意味・機能は自問を示すものと認めたうえで、明治期から現在まで「かしら」の歴史的な流れを調査し、自問表現形式としての「かしら」が女性的な表現に定着した道筋をたどっていく。

3. 資料調査

3.1. 調査方法・対象

本稿は明治初年より現在（平成 15 年）までに発表された小説を資料として用いた。調査した作品名及びテキストは論文末に掲げる。資料を選定するにあたって、男女登場人物のバランスを考慮したが、男女の言語量が必ずしも同じにはなっていない[*4]。また、男女それぞれ同じ属性（例えば年齢、社会階層など）を持っている登場人物であるとも限らないが、明治期から現在までの流れの中で終助詞「かしら」の男女の使用差をみることが可能であると考える。

考察の便宜上、明治から現在までを以下のような六つの時期[*5] に分けて、男女の

---

*4 特に明治初年の小説には女性登場人物の言語量は男性ほど多くない。

*5 明治以後東京語の成立と発展について、研究の立場によりさまざまな時期区分がなされている。本稿は松村（1957）を根幹として若干の修正を加えた。松村（1957）（p.87）（1998 再録）では以下の五つの時期に分けている。

第一期　明治前期（形成期）明治初年から明治十年代の終わりまで；

第二期　明治後期（確立期）明治二十年代の初めから明治の末年まで；

第三期　大正期（完成期）大正の初年から大正十二年九月の大震災まで；

第四期　昭和前期（第一転成期）大正十二年の関東大震災から昭和二十年八月の終戦まで

第五期　昭和後期（第二転成期）終戦後から今日（1957）まで

とする。本稿は終戦以降現在までの間は昭和 50 年を境にさらに分け、昭和末期以降を第六期と設定した。

「かしら」及び「かしらん」[*6]の使用状況をまとめた。

第一期　明治前期　明治初年から明治10年代の終わりまで（1868年～1886年）
第二期　明治後期　明治20年代の初めから明治末年まで（1887年～1912年）
第三期　大正期　大正初年から大正12年の関東大震災まで(1913年～1923年)
第四期　昭和前期　大正12年の関東大震災後から昭和20年の終戦まで（1923年～1945年）
第五期　昭和後期　昭和20年終戦後から昭和40年代の末まで（1945年～1974年）
第六期　昭和末期以降　昭和50年から平成15年まで（1975年～2003年）

前述のように、終助詞「かしら」は自問性の強い表現である。自分自身に対して呟いている場合（本稿では「独言」と呼ぶ）や心内発話を引用する場合（本稿では「心内語」と呼ぶ）など対自的な場面でもよく出現する。したがって、男女登場人物の「かしら」の使用例を会話文、心内語や独言と分けて、それぞれの別に注意して分析を加えることとする。

また、以下の用例のように、「何かしら」「誰かしら」「どこかしら」のような形で文中において修飾句として用いられるものは対象外とする。

・どうしても気になったら、地下鉄の駅に行けば、どこかしらに鏡があるから、それに写して見て剃り残しは、携帯用のヒゲ剃りでちょこちょこと補って剃っておけばいい。　（太郎物語・太郎の心内語）

3.2.調査結果

表1は各時期における男女それぞれの「かしらん」及び「かしら」の使用状況を

*6 「かしら」の前の形式である「かしらん」と「かしらぬ」を両方ともに調査した。「かしらぬ」の使用例は以下の一例しか見つからなかったので、「かしらん」と「かしら」はまとめて扱っている。

・「彼女に何したのじゃないかしらぬ」トある時われを疑って覚えず顔を赤らめた。
（浮雲・文三の心内語）

まとめた表である[*7]。

表1

	かしらん								かしら							
	男性				女性				男性				女性			
	会話	独言	心内語	計	会話	独言	心内語	計	会話	独言	心内語	計	会話	独言	心内語	計
第一期	23	2	2	27 (16)	0	2	1	3 (3)	0	0	0	0 (0)	1	0	2	3 (2)
第二期	15	5	21	41 (20)	0	1	5	6 (5)	19	4	24	47 (23)	33	2	23	58 (24)
第三期	1	2	8	11 (7)	0	0	5	5 (3)	11	0	18	29 (10)	43	2	3	48 (13)
第四期	1	0	2	3 (2)	0	0	1	1 (1)	13	0	6	19 (10)	90	5	32	127 (21)
第五期	0	0	1	1 (1)	3	0	1	4 (3)	6	0	9	15 (7)	96	3	24	123 (25)
第六期	0	0	0	0 (0)	0	0	0	0 (0)	0	0	0	0 (0)	101	2	11	114 (38)

＊表内の数字は使用度数であり、()の中の数字は使用者数である。

表1から分かることは次の三点である。

①時代の推移に従い、「かしらん＞かしら」という語形の変遷が読み取れる。
明治後期から大正期にかけて、使用者数と使用度数から見ると、「かしら」の形式が「かしらん」を上回るようになっている。昭和前期に入り、「かしらん」

*7　明治期の使用例の中で、「か知らん」「か知ら」のような漢字が使われる例もある。時代が下がるにつれ、「かしらん」、「かしら」のような平仮名書きが多くなり、現在では平仮名書きの形式しか見つからない。本稿ではこのような表記のことは問題とせず、それぞれ「かしらん」、「かしら」と認め、一緒に取り扱うことにした。

の用例はわずかに残っているだけであり、「かしら」という形式に定着したといえる。明治後期から大正期にかけてが「かしら」の語形形成に重要な時期であると指摘できる。

②使用者数と使用度数から見ると、当初から女性のほうが男性よりも新形式である「かしら」を多用する傾向が見られる。その傾向は昭和前期に入り、より強くなった。昭和末期以降、男性の使用例が見られなくなり、「かしら」の使用者が女性のみであることが分かる。

③自問性の強い表現形式である「かしらん」及び「かしら」は心内語や独言はもちろん、会話文にも大量の用例が採集される。特に、明治後期以降、女性の会話文における使用度数の多さが注目される。

4.「かしらん>かしら」の推移における男女の使用状況

「かしら」の形式は既に近世江戸語資料に見られるが、明治前期の作品にはあまり現れない。以下の三例が今回の調査で採集されたすべてである。いずれも坪内逍遥の作品の用例で明治18年と明治19年のものである。

1)（お）長く面白くかけバいゝのに。「いろは」にしちゃア珍らしく端折ツてかいたヨ。探トウがゆきとゞかなかつたのかしら。（田）さうネエ。辨吉さんの是非ハ。ほんとにこんなこと所じゃないワ。

（當世書生気質・お年→田の次）

2)「今まで一晩でも家をあけて。お宿ンなすッた事ハないに……いつそ表をしめやうかしら……ヲヤもう三時だヨ……（略）……シロ田といふのハ娼妓ジャないかしら…」（妹と背かゞみ・お辻の心内語）

例（1）は芸者同士が新聞を読みながら、会話している場面での使用例である。例（2）は夫の帰宅を待っている官員の妻お辻の心内語の用例である。用例が3例と少ないがいずれも女性の使用例である。男性による「かしら」の使用例はない。

明治20年に成立した『浮雲』では女学生お勢が母親のお政との会話に「かしら」を2例使用している。

3)「エート下着は何時ものアレにして ト其から上着は何衣にしやうかしら、矢張何時もの黄八丈にして置かうかしら……「最も一ツのお召縮緬の方にお為ヨ。

彼方がお前にやア似合ふヨ。　（浮雲・お勢→母のお政）

明治前期には「かしら」より「かしらん」の形式が多く見える。

4）弥「そいつハ妙だがだれか見ちやアゐねへかしらん　北「さいはひあたりに人もなし此間にはやく　（西洋道中膝栗毛・弥次郎→北八）

5）須河「宮賀は何処へ行きをつたかしらん。ハテ困った事になつたなア。」（當世書生気質・須河悌三郎の独言）

6）「どうも不思議なお子さんだヨ。（略）内々お嬉しいと思ってゐながら、人にさうみられちゃ悔しい。と思って。アゝして空とぼけてゐなさるかしらん。」（妹と背かゞみ・お鎌の独言）

7）「今日まで其の書面を見せて下されぬのは、如何いふ譯であるか知らん。」（雪中梅・お春の独言）

8）「竹村君、先刻から君に聞いて見やうと思って居たが、武田はまだ上州から帰つて来ぬか知らん」　（雪中梅・国野基→竹村某）

「かしらん」の使用例はほとんど男性であり、女性の使用例は例 6）と例 7）を含め 3 例しかない。江戸語には男女ともに話し言葉として「かしらん」を用いたと言うが[*8]、本稿の調査では男性の方が「かしらん」の使用頻度が高いという結果が出た。女性の方は旧形式である「かしらん」と新形式である「かしら」のどちらも用例数が 3 例と少ないため、調査資料の資料性の問題なのか、あるいは女性に関しては「かしらん」と「かしら」の他に、それに代わる表現が別に存在するのかもしれない。幕末・明治前期女性の自問表現形式については別稿に委ねたい。

明治後期に入り、特に明治 30 年前後の作品からは、「かしら」の形式がよく見られるようになってくる。

9）己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ出すよ。（たけくらべ・正太郎→美登利）

10）「然し是は猶且俺が悪いのかしら。」　（錦木・桐谷保則の独言）

*8 『大辞林』（松村編第二版 p.471）「かしらん」の項には「江戸語では男女ともに話し言葉として用いた」と示されている。

11)「しかし、その書くのと、お目に懸かるのと何方が早いかしら？いっそ書いてあげようかしら。」 (紺暖簾・お扇の心内語)

12)「まあ、朝から眠りつづけなんで御座いますよ。あんなに眠るのがどうでしょうかしら」 (破戒・お志保→土屋銀之助)

明治後期から大正期にかけての作品には「かしらん」と「かしら」が並行して使用されている様子が見える。明治 39 年発表された『破戒』では土屋銀之助は「かしらん／かしら」を併用している。

13)「一体、肺病患者といふものは彼様いふものかしらん。」 (破戒・土屋銀之助→瀬川丑松)

14)「まあ瀬川君は相変わらず身体の具合でも悪いのかしら。」 (破戒・土屋銀之助→瀬川丑松)

大正 5 年の『明暗』では、お延は「かしらん／かしら」を併用している。

15)「此方の気の所為かしらん」お延がこう考えてゐると，問題の婦人が突然彼女の方に注意を移した。 (明暗・お延の心内語)

16)お延は躊躇した。「あたしどうしようかしら」 (明暗・お延の心内語)

ただ、使用者数と使用度数から見ると、「かしら」が「かしらん」を上回るようになっている。明治後期から大正期にかけては、「かしらん＞かしら」の語形形成における大きな転換期であろう。また、『初すがた』(明治 33 年)『錦木』(明治 34 年) 辺りから、男性の「かしら」の用例も多く見えてくる。明治後期には、男性の場合「かしらん」と「かしら」の両方の使用者数と使用度数がほぼ同じになってきている。女性の方は「かしらん」の形式の用例もないわけではないが、「かしら」が 58 例 (使用者 24 人) に対して、「かしらん」はわずか 6 例 (使用者 5 人) である。つまり、女性の方が「かしらん」から生まれてきた新形式である「かしら」を相対的に多用するといえる。

大正期の作品になると、「かしらん」の用例数が極端に減少している。昭和前期に入ると、「かしらん」の用例はわずかで、ほとんどは以下のような「かしら」の形式の用例である。しかも、使用者はほぼ女性に限られ、男性の使用例は非常に少ない。

17)「あんな風つて、変つてらしたか知ら。」　（真知子・真知子→嫂）
18)「あの、どうしてご夫婦が別れるようになったのか、聞かせていただけますかしら？」　（青い山脈・雪子→新子の母）
19)「でも、あたしって不幸な女ね。ね、婆や、こんな不幸な女ってこの世にいるものかしら」　（楡家の人々・桃子→婆や）

昭和末期以降になると、男性の使用例は一例も見られなく、使用者は女性のみになっている。

20)「ねえ、ねえ、坂本さんに頼むと安く買えたりするのかしら」「すこしぐらいならね」　（東京キュン物語・美紗子→坂本晴美）
21)「飲み物はワインでいいかしら」ええ、と言って椅子に座り、私はあらためて目の前の美人を見つめた。　（つめたいよるに・清水の奥さん→私）
22)「海なんてちっともいいものじゃないのに、どうしてみんな海に来たがるのかしら」私が心から同意したが、「でも、私たちも来てるわ」
（落下する夕方・根津華子→坪田梨果）

まとめると、昭和前期に入り、形態上、「かしらん」から「かしら」に定着するとともに、使用者がほとんど女性に限られるようになり、「かしら」は女性のことばになってきたといえる。明治後期から大正期にかけては「かしらん>かしら」の推移においても、男女の使用においても、重要な時期であるといえるだろう。したがって、この時期に男女の具体的な使用状況を考察するのは、「かしら」における男女差の形成を解明するのに有意義であると考える。次節では明治後期に焦点をあてて、男女の使用差を考察してみる。

5.「かしら」における男女差の形成—明治後期を中心に

本節では、明治後期の「かしら」について見ていく。
まず会話の使用例から見ると、男女の使用差がはっきりと現れる。

23)「お怒りあそばしたのですかしら」「何、貴女宜しいのでございますよ。」
（紺暖簾・お扇→お淑）

24)「ですがね、貴女にもう一度願って、お隣へ行って頂きませうかしら」
「私、隣へ？！」 (紺暖簾・お扇→お諦)
25)「私むしろ千葉へ行ってみましょうかしら」 (其面影・小夜子→哲也)
26)「楽しい日？」とお志保は寂しそうに微笑みながら、「私なぞにそんな日が御座いましょうかしら」 (破戒・お志保→銀之助)
27)「他の月と違って今月は十二月ですから、待ってくれますかしら」
(破産・妻→夫)

以上のような丁寧体に「かしら」を接続している使用例はほぼ女性に限られ、男性の使用例は一例しか見当たらない。職人である板工師丑之助が旦那様に対して使用する用例である。

28)「旦那はエ、市中新聞といふのを御覧になりましたかしら」「否私は取って居らんが。」 (錦木・丑之助→桐谷保則)

男性の場合、以下のように常体に「かしら」を接続するのが普通である。

29)「はゝゝゝ、餘程僕が怖いと見えるね、是れで、僕は其様な強敵か知ら？」
(初すがた・笠田秀二→女中)
30)「否知らんね。どういうことが書いてあったのかしら」
(錦木・桐谷保則→丑之助)
31)「それはそうと、貴方の家を出たのは何時だったかしら？」
(其面影・哲也→小夜子)
32)「ハゝゝゝ。時に御叔父さんの遺物はもう着いたかしら」
(虞美人草・宗近一→甲野欽吾)

女性の方が丁寧体に「かしら」を後接する使用例が多い点に注目したい。歴史的には、「かしら」の基本的な意味・機能は自問であり、聞き手に尋ねるというよりむしろ自分自身に向かって発話する面が強いのであるが、一方、「です・ます」及び「でしょう・ましょう」などのような丁寧体は聞き手に対して敬意が含まれ、積極的に聞き手に向かって発話されるものである。女性の用例に「丁寧体＋かしら」の用例が多く見られるのは、女性使用者が聞き手に向かって配慮しながら、実質的に自らの疑問や問いかけを聞き手に表明しているのである。つまり、男性の「かし

ら」も女性の「かしら」も意味的には同じで、話し手の自問を示すのだが、男性の「かしら」の場合は、聞き手に対する配慮はせず、自らの疑問をそのまま表明するだけであるが、女性の「かしら」の場合は「です・ます」などと共に用いることにより、自分自身が抱いている疑問を聞き手に知らせ、その疑問を聞き手と共有し、実質的には聞き手に相談したり、聞き手の反応を求めたりする気持ちを含ませているわけである。例 23）はお嗣が実質的にはお淑の息子さんの気持ちを訪ねようと思っており、例 25）は小夜子が実質的に自分のこれからの行動について、聞き手と相談したいという期待が含まれている。例 27）は自らの疑問を夫に提示し、夫の反応を聞きたい気持ちが含まれている。いずれも、直接的な問いかけを避けて、より間接的に自分の疑問を聞き手に知らせ、聞き手の答えを期待するのである。特に例 24）の場合は直接的に聞き手に依頼するより、「ていただきましょう＋かしら」の形で、依頼は間接的になる。

一方、男性ならば、例 28）のように、職人が旦那さんに対して、非常に丁寧で控えめな発話をするような特別な場面もあるが、質問ならば、次の例 33）のように「か」で直接問いかけたり、自問なら、例 29）～ 32）のように、「常体＋かしら」を使用して表明する。しかし、女性の方は実質的に問いかけたい時も直接的な質問の形を避けなければならない。

33）「君の所の先生の名は何と言うの<u>か</u>」（三四郎・小川三四郎→佐々木與次郎）

一般的に、男性の話し方に対して、女性の方は、自分の考えを相手に押し付けずに述べる、相手に対して主張や要求をはっきりさせない[*9]、よりやわらかで丁寧なことばづかいをするべきだという意識がある。質問を投げかけたり、聞き手に疑問を押し付けたり、答えを強く要求したりすることは女性の嗜みとしてはよくないと考えられている。したがって、女性の対話ストラテジーとしては、より間接的な、より丁寧な発話の仕方を選ばなければならない。終助詞「かしら」が丁寧体と共に現れる表現が女性に多く用いられたのは、その対話ストラテジーにおける男女差の反映ではないかと考えられる。

---

*9 益岡・田窪（1989）では「一般的に、女性的な表現は、断定をさけ、命令的ではなく、自分の考えを相手に押し付けずに述べる、という特徴を持つ。これに対して、男性的な表現は、断定、命令を含み、主張、説得をする表現を多く持つ。」（p.201）と指摘している。

次に、独言や心内語などの場面における男性と女性の使用例を見てみる。

34)「なほ已作に頼んで、一所にきて貰った方が可くはないかしら？」
(紺暖簾・お淑の心内語)

35)「おや」とじっと眼を据えて、「龍ちゃんぢゃないかしら？」
(初すがた・玉枝の独言)

36)「直に，これから尋ねて行つてみようかしら」と続いて起こった思想であった。 (破戒・瀬川丑松の心内語)

37)「降らなければ、私一寸出て来ようかしら」 (三四郎・里見美祢子の独言)

38)「佐々木は何をしているのかしら。遅いな」 (三四郎・広田蓑の独言)

会話場面で見られたような、はっきりした男女差はあまり見られない。それは、心内語と独言は音声が伴うかどうかの違いはあるものの、両方ともに心に抱いている思いや考えを自分自身に向かってそのまま表出するものである。言わば、聞き手目当てのものではなく、対自的発話であるためと考えられる。対他的な発話としての会話のように、自分が「男である」或いは「女である」というアイデンティティを表明する、ないしは保つ必要がないため、独言や心内語のような対自的表現には男女の差が薄れていると考えられる。

日本語終助詞における男女差は明治以後に形成されたと言われている[*10]。また男性の話し方に対して、女性の話し方はやわらかく、丁寧なことばづかいをすべきだと社会から期待されている。これに応じて、「男性らしい」、「女性らしい」話し方が生まれ、守られている。特に、会話においては、女性は「女性である」ことを意識し、女性らしい言い方を選択しなければならない。「かしらん」から生まれてきた新形式である「かしら」は明治後期以後の小説で、登場人物の女性の発話に当てはめられていくことによって、小説の世界では、「かしら」を使用する女性のステレオタイプが形成され、「かしら」は女性らしい言い方としてのイメージが投影さ

*10 小松（1988）では、「東京語終助詞の男女差は江戸語まではさかのぼらない」（p105）「東京語の男女差は遅くとも明治の末に完成している。」（p.95）と述べている。また鈴木（1998）では、「明治期に入ると、次第に女性特有のことばづかいが確立されて行き、男性のことばとは違う体系が出来上る。」（P.162）と指摘している。

れる。したがって、小説の世界では「かしら」は女性的であるとなってくるのである。明治以後の終助詞における男女差の形成において「かしら」はその一翼を担った。女性らしい表現というイメージの普及に従い、ますます女性が多く使用することによって、一層女性的な表現として定着していったのではないかと考えられる。表１において明治後期以降、大正期、昭和前後期の小説に女性による「かしら」の使用頻度の数値が増加するのは、そのような歴史の流れを物語っているからではなかろうか。

しかし一方、大正以後昭和後期まで使用例が少ないながら男性の使用者がいる。

39)「節子さんはお起きになっているかしら」　　（風立ちぬ・私―節子の父）

また、現在においても現実生活で男性が「かしら」を使用する場面がしばしば見受けられる。終助詞「かしら」の使用には性差がないというわけではない。ただし、一方の性だけの使用に限り、他方の性が全然使用しないという「相互排除的性差表現」(sex-exclusive differentiation) [*11] ではなく、一方の性の使用に傾いているというような「傾向的性差表現」(sex-preferential differentiation)である。このような女性の使用に傾いている「かしら」を男性が使用する場合、「やさしい・婉曲的」というニュアンスを持つ女性的性格の強い表現として用いているのであろう。

6.まとめ

今回は明治期から現在まで発表された小説を調査し、終助詞「かしらん＞かしら」という語形変化の流れの中で男女の使用差を調査した。使用者数と使用度数から見ると、昭和前期頃語形が「かしら」に定着するとともに、女性的な表現として定着していることが分かった。また、明治後期に焦点を当てて、男女の使用差を考察し

*11 Bodine,Ann(1975)では "the forms which were described under the rubric "men's and women's languages (or speech)" were generally exclusively used by either one sex or the other.This type of differentiation,which may be called sex-exclusive differentiation.Differences in frequency of occurrence of any form between the speech of women and men,which may be called sex-preferential differentiation." (p.131) と、"sex-exclusive differentiation" と "sex-preferential differentiation" という概念を用いて、性差の問題をとらえた。

た。明治後期の作品では、女性は会話においては丁寧体と共存して終助詞「かしら」を使用する用例が多く見られることが分かった。直接的な問いかけや依頼を避け、柔らかな丁寧さを示しており、明治以後形成された発話の仕方における男女差の反映と見られる。小説の世界では、明治後期から「かしら」を使用する女性のステレオタイプが形成され、大正期をへて、昭和前期に至り女性的表現として定着してきたのではないかと考えられる。また、今回の調査によると、独言や心内語のような対自的場面では、男女のことばづかいの差が薄れていることが分かった。

日本語においては、男女の発話に大きな違いがあるとよく言われているが、実際の言語使用実態では、男性の発話と女性の発話との境界が明確で、互いにまったく異なる発話を使用するわけではなく、一方の性のみの使用に限らないケースが多く見られる。したがって、日本語における男女差の問題はある語を使用する性を固定的に捉えているのではなく、強弱の度合いの差で捉えるのが適当であろうと考えられる。中村（2001）は、「女性性（femininity）」「男性性（masculinity）」という概念を提案した。従来の二項対立的なジェンダー観から抜けだして多様なジェンダー・アイデンティティを表す概念である。日本語における性差の研究の鍵となる概念であるといえる。つまり、女性性の強い発話と男性性の強い発話があり、その中間に男女どちらでも使用される発話が多様に存在しているのである。本稿で調査した終助詞「かしら」はこのような女性性の強い表現形式であると思う。

また本稿は小説を調査対象とした。小説の世界は現実の間にはギャップが存在している。現実では使わない女性性の強い表現、男性性の強い表現でも小説の世界では自然に使用されている。社会通念上のステレオタイプが小説の世界では重要な要素となっているからである。このようなステレオタイプの形成はまた一方で現実の言語に影響を与えるのである。終助詞「かしら」はその典型的な一例であると思われる。

【参考文献】

井出祥子（1983）「女らしさの言語学―なぜ女は女性語を使うのか」『話しことばの表現　講座日本語の表現3』筑摩書房

遠藤織枝・尾崎喜光（1998）「女性のことばの変遷―文末・コト・テヨ・ダワを中心に―」日本語学5号　明治書院

太田淑子（1992）「談話にみる性差の様相―終助詞を中心として」横浜国立大学教育紀要32

カノックワン・ラオハブラナキット（1996）「「カナ」「カシラ」に関する考察」『日本

語と日本文学』23号　筑波大学国語国文学会
国立国語研究所報告3（1951）『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版
国語国立研究所報告18（1960）『話しことばの文型（1）―対話資料による研究―』秀英出版
小松寿雄（1988）「東京語における男女差の形成―終助詞を中心として」国語と国文学65-11
後藤斉（1996）「コーパスとしての新聞記事テキストデータ―終助詞『かしら』をめぐって」東北大学言語学論集5
佐々木峻（1993）「大蔵流狂言詞章の文末表現法―「…か知らぬ。」「…ぢゃ知らぬ。」等の言い方について―」『近代語の成立と展開』（山内洋一郎、永尾章曹編）和泉書院
鈴木英夫（1998）「現代日本語における女性語の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』（佐々木峻、藤原与一編）弥生書店
鈴木睦（1997）「女性語の本質―丁寧さ、発話行為の視点から―」井出祥子編『女性語の世界』明治書院
中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』勁草書房
堀崎葉子（1995）「江戸語の疑問表現体系について―終助詞カシラの原型を含む疑い表現を中心に―」青山語文25号
益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
松村明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂
――――（1998）『増補江戸語東京語の研究』東京堂
三宅知広（2000）「疑問表明の表現について―カナ・カシラを中心に―」鶴見大学紀要37号
村上昭子（1981）「終助詞「かしら」の語史」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店
矢島正浩（1996）「「疑問表現＋しらぬ」の表現―近世前・中期の狂言台本を資料として―」　国語学研究（東北大学）35
山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院
湯澤幸吉郎（1953）『口語法精説』明治書院
湯澤幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院
れいのるず・秋葉かつえ（1997）「言語と性差の研究―現在と将来」井出祥子編『女性語の世界』明治書院
Vanbaelen, Ruth.（2003）「性差マーカーの自然さ―小説の会話文と実際の会話との比較」

『日本語と日本文学』36号 筑波大学国語国文学会
Bodine, Ann. (1975) "Sex Differentiation in Language". *Language and Sex: Difference and Dominance*. Eds. Barrie Thorne & Nancy Henley Rowley, Mass: Newbury House. 1975

『日本語文法大辞典』山口明穂他編　明治書院2001年
『日本国語大辞典』第二版　小学館2000年
『大辞林』第二版　松村明編　三省堂1995年

【調査資料】

本稿で調査した資料は以下のようである。括弧の中はそれぞれ成立年代・作家・使用テキストである。

（第一期）明治前期：

西洋道中膝栗毛（明治3・仮名垣魯文・明治文学全集1　筑摩書房）菊模様皿山奇談（明治4年・三遊亭円朝・円朝全集巻ノ九　世界文庫）安愚楽鍋（明治5・仮名垣魯文・明治文学全集1　筑摩書房）春雨文庫（明治9年・松村春輔・明治文学全集1　筑摩書房）青楼半化通（明治11・万亭応賀・明治文学全集1　筑摩書房）鹽原多助一代記（明治17・三遊亭円朝・円朝全集巻ノ十二　世界文庫）當世書生気質（明治18・坪内逍遥・明治文学全集16　筑摩書房）妹と背かゞみ（明治19・坪内逍遥・明治文学全集16　筑摩書房）雪中梅（明治19・末広鉄腸・明治文学全集6　筑摩書房）

（第二期）明治後期：

浮雲（明治20・二葉亭四迷・明治文学全集17　筑摩書房）藪の鶯（明治21・三宅花圃・明治文学全集　筑摩書房）露子姫（明治22・石橋忍月・明治文学全集23　筑摩書房）たけくらべ・この子（明治28・樋口一葉・樋口一葉全集　和泉書院）金色夜叉（明治30・尾崎紅葉・明治文学全集18　筑摩書房）不如帰（明治31・徳富蘆花・筑摩現代文学大系5　筑摩書房）初すがた（明治33・小杉天外・明治文学全集65　筑摩書房）錦木（明治34・柳川春葉・明治文学全集22　筑摩書房）紺暖簾（明治34・山岸荷葉・明治文学全集22　筑摩書房）其面影（明治39・二葉亭四迷・日本近代文学大系4　角川書店）野菊の墓（明治39・伊藤左千夫・左千夫全集第二巻　岩波書店）破戒（明治39・島崎藤村・現代日本文学大系8　筑摩書房）蒲団（明治40・田山花袋・明治文学全集67　筑摩書房）虞美人草（明治40・夏目漱石・漱石全集第4巻　岩波書店）三四郎（明治41・夏目漱石・春陽堂）波瀾（明治42・森しげ・現代日本文学大系5　筑摩書房）田舎教師（明治42・田山花袋・明治大正文学全集第23巻　春陽堂）あきらめ（明治44・田村俊子・現代日本文学大系7　筑摩書房）青年（明治44・森鴎外・精選名著復刻全集）

（第三期）大正期

心（大正3・夏目漱石・春陽堂）明暗（大正5・夏目漱石・漱石全集7　岩波書店）腕くらべ（大正5・永井荷風・日本近代文学大系29　筑摩書房）父帰る（大正7・菊池寛・新潮文庫）友情（大正8・武者小路実篤・定本　武者小路実篤選集3　日本書房）あらくれ（大正9・徳田秋声・秋声全集5　雪華社）千人風呂（大正9・葛西善蔵・葛西善蔵全集1　文泉堂）伸子（大正12・宮本百合子・宮本百合子全集3　新日本出版社）

（第四期）昭和前期

伊豆の踊子（昭和元・川端康成・川端康成全集2　新潮社）真知子（昭和3・野上弥生子・野上弥生子全集3　岩波書店）女の一生（昭和7・山本有三・山本有三全集7　新潮社）若い人（昭和8・石坂洋次郎・新潮文庫）雪国（昭和10・川端康成・川端康成全集10　新潮社）縮図（昭和11・徳田秋声・秋声全集13　雪華社）機械・上海（昭和12・横光利一・定本横光利一全集3　河出書房新社）風立ちぬ（昭和11・堀辰雄・風立ちぬ・美しい村・精選名著復刻全集）檸檬（昭和14・梶井基次郎・檸檬・新潮文庫）オリンポスの果実（昭和15・田中英光・田中英光選集第一巻　新潮社）

（第五期）昭和後期

斜陽（昭和22・太宰治・太宰治全集　筑摩書房）青い山脈（昭和22・石坂洋次郎・現代文学大系54　筑摩書房）夏子の冒険（昭和26・三島由紀夫・三島由紀夫全集　新潮社）千羽鶴（昭和27・川端康成・川端康成全集　新潮社）・山の音（昭和29・川端康成・川端康成全集　新潮社）おとうと（昭和31-32・幸田文・幸田文全集　岩波書店）点と線（昭和32-33・松本清張・松本清張傑作総集一　新潮社）忍ぶ川（昭和35・三浦哲郎・新潮文庫）楡家の人々（昭和37・北杜夫・新潮社）　眼の壁（昭和37・松本清張・松本清張傑作総集一　新潮社）花のいのち（立原正秋・昭和42年・新潮文庫）太郎物語（昭和47-48・曾野綾子・曾野綾子選集第七巻・読売新聞社）

（第六期）昭和末期以降

寺内貫太郎一家（昭和50年・向田邦子・新潮文庫）風の音を聞け（昭和57・村上春樹・新潮文庫）東京胸キュン物語（昭和62年・林真理子・角川文庫）つめたいよるに（平成1年・江国香織・新潮文庫）風の噂（平成2年・渡辺淳一・新潮文庫）君を送る（平成4年・赤川次郎・新潮社）落下する夕方（平成8年・江口香織・角川書店）冷静と情熱の間blue(平成11年・辻仁成・角川書店)天気予報の恋人（平成12年・岡田恵和・角川書店）渡る世間は鬼ばかり（平成13年・橋田寿賀子・英知出版社）十津川警部ある女への挽歌（平成15年・西村京太郎・小学館文庫）

ニン リ／人文社会科学研究科

（2003年9月16日 受理）